

JA白山 令和7年度有機栽培(水稲)マニュアル※JAS不認可

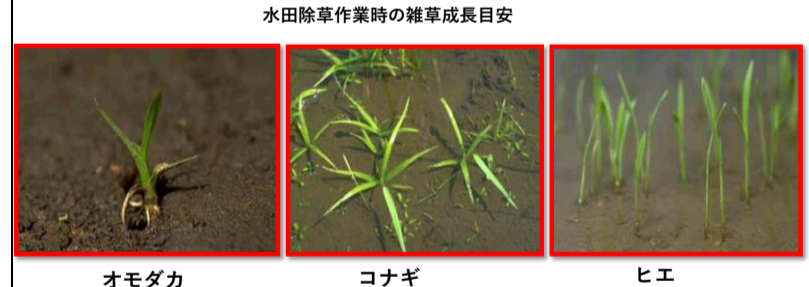
～ 安心・安全なお米で低コスト栽培を目指して～

	4月			5月			6月			7月			8月			9月		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
生育経過 (株当たり 茎数/本)	30																	
	20																	
	10																	
	0																	
	作業	堆肥散布	耕起	代掻き①	代掻き②	代掻き③	田植	除草①	除草②	除草③	穂肥①	穂肥②	溝切	出穂				稲刈
水管理	深																	
	中																	
	浅																	
施肥体系	商品						有機ア グレット674			肩大豆 散	有機ア グレット727	有機ア グレット727						
	10a						40kg			50kg	40kg	40kg						

堆肥散布	10a当たり1～2t散布。(水田が湿田状態の場合は堆肥散布は避ける)
水田準備	水田周辺の江の清掃及び畔塗作業を行い、栽培期間中の水管理がしやすいようにする。
耕起	トラクター作業速度0.8～1km、深耕は15cmを保ち作業を行う。(速度が速いと稲株及び稲わらが鋤き込まれず田植後にガス湧きが発生し生育が遅れる。)
代掻き	<ul style="list-style-type: none"> 水管理＝田面の土が少し見える程度 ※深水になると雑草が浮き土壌表面に付着し抑制が難しくなる。 ・作業速度＝0.7～0.9km 1回目代掻き：田面の高低差をなくすよう土寄せ作業を行い、作業後浅水管理を行い1～2週間保ち雑草をなるべく発生を促すよう管理する。 2回目代掻き：雑草の鋤き込みを行う。・・・3回目代掻き：田植前準備。
田植	<ul style="list-style-type: none"> 植付：株数70株/植付本数3～5本 水田除草準備：水田除草機は8条幅である為、田植時に8条幅になるように行い8条ごとに1条ずつ空けるように行うことで除草作業時の目印とする。 施肥：基肥＝有機アグレット674：40kg/10a ※有機肥料の為田植機施肥機内に湿気・水等があると詰まりやすいので小まめな点検を行う。
水田除草作業 (オーレック：ウィードマン使用)	<ul style="list-style-type: none"> 田植後7日後(稲の活着したあと)浅水にし水田除草機作業を行うが、作業手順は田植作業時と同じ順番で行う。 作業速度が速いと雑草の除去ができず及び稲痛みが発生する為、状況に応じて作業速度を変える。 水田除草作業は、田植から最高分け時期までの約1カ月間で3～4回作業することをオススメ。※1回目除草機作業後1週間程度の間隔で3～4回
肩大豆散布	<ul style="list-style-type: none"> 水田除草最終作業終了肩大豆約50kg/10a散布を行う。 肩大豆散布効果：肩大豆に含まれるサポニンなどの成分による雑草抑制及び大豆に含まれる窒素還元化。
穂肥	<ul style="list-style-type: none"> 有機質肥料のため通常の化学肥料穂肥より肥効が遅い傾向がある為、慣行栽培穂肥時期よりも1週間早めに散布することを勧める。 また、慣行栽培と違い葉色が低下しすぎると葉色の維持が困難な為葉色を淡くしすぎない。※必要な場合は3回目の穂肥又は実肥も施用する。
水管理	<ul style="list-style-type: none"> 原則稲刈り2週間前まで深水管理で栽培するとし、水田除草機による除草作業を行う場合は浅水管理で実施し、中干しについては穂肥散布後に1週間程度行うのが望ましいがあくまでも稲刈り準備の為と考える。



【水田除草機】
メーカー：オーレック
型式：SJ800A
小売価格：5,614,400円
総重量：700～725kg
適用条数：8条
適用条間：300mm



【有機栽培経費(10a)】
苗代 21,000円
肥料費 27,000円
燃料費 5,100円
人件費 33,750円
委託費 18,000円
リース料30,000円
計 134,850円

～ 有機栽培(水稲)の目標と注意点 ～

- 【目標】
- ①水田除草機を使用し雑草除去作業のコスト削減。
 - ②雑草抑制100%は難しくコンバインで刈れる程度に雑草抑制をする。
- 【注意点】
- ①長期間深水管理を行う為、稲株が弱くなり倒伏する確率が高くなるので小まめな水管理と中干しのタイミングが重要。
 - ②耕起→代掻き→田植→水田除草の各作業については、適正な速度で作業を行うことが重要。
 - ③田植が5月後半になる場合は、適正な茎数確保が難しいことから株数及び植付本数を増やすことをお勧めします。

白山ナチュラルアグリ推進協議会は、有機栽培を通じて環境負荷低減農業を推進し食の安全確保を目的として活動しています。